

二〇二六年度入学者選抜試験問題

国

語

(六〇分)

問題は□から■まで(19ページ)ある。

解答は、すべて別紙の解答欄に記入すること。

文字は正しくていねいに書くこと。

句読点も一字に数える。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

筆者は「子ども哲学」という活動を、全国の教育機関や図書館で行っている。その内容は、「哲学的なテーマについて、子ども同士、あるいは大人も一緒に考えて、語り合う」というものである。次の文章は、その活動の成果を元にして書かれている。

対話とは、あるテーマについて自分の考えを提示しあい、相互に検討し、吟味するという過程である。ひとつのテーマや問いに対して、それぞれが意見を出し合うときに、すぐに明らかになるのは意見の **X** である。子どもの哲学をはじめに行った子どもの感想としてもっとも多いのが、「いろいろな意見があるので驚いた」「普段からよく知っている友だちが、あんなことを考えているとは思わなかった」というものである。比較的文化的・地域的な背景が均一である小学校で行っても、こうした感想が得られる。さらにさまざまな背景を持った人々の意見ならば、異なっているのが当たり前である。

哲学対話の特徴は、自分の意見が皆からの検討に付される点である。通常の話し合いでは、人はどうしても持説に固執してしまう。とくに自分のさまざまな行動の前提となっているような信念や、自分が常識と思っているような信念についてならば、なおさらである。普段はこのような自分の深いところにある考えを簡単には披露しないし、かりに披露してもそれを検討し合うことはしない。大人の方が、子どもより自分の意見に固執しがちであるし、人の意見を聞こうともしないことがある。

しかし哲学対話ではあえて持説を検討し合うことを目的としている。ディベートが持説を擁護して、相手を説得することに目的があるとするれば、哲学対話で重要とされるのは、相手の話を傾聴して、そこで得られた視点や立場から自分自身の考えを検討し、必要とあればそれを変える姿勢でいることである。これが哲学対話と他の対話との違いである。哲学とは、自分の前提や習慣、信念を自己吟味し、場合によっては自己変更する試みだからである。

このような自己吟味の姿勢を保つには、新しい考えを作り出すという気持ちで対話に参加することが大切である。

A

こ

の気持ちを対話の最初から持つことは難しいかもしれない。皆で対話をするときには、テーマや問いが設定される。そして、誰かがそれについての意見を言う。他の人がそれとは異なる意見を言う。そしてそれぞれの意見に対して、質問が出され、対立する意見との比較がなされ、批判的な吟味がなされる。ひとつの意見は、さまざまな角度と視点から、多様な立場から検討され、広い文脈と背景の中に置き直される。思考は、ある前提に立って議論を進めようとする。対話は議論の前提からさらに引き下がるようにする。思考は進行的で、対話は遡行的である*。

議論には、ズームインとズームアウトという過程があると言える。ズームインとは、あるテーマや問いを、さらに詳細にしばしば具体的に論じていく過程である。ズームアウトとは、あるテーマや問いを広い文脈や枠組みに置いて、*ちようかん鳥瞰図を得ようとする過程である。ズームインから得られる議論は、問題解決的であり、専門的で技術的になっていく。他方、ズームアウトから得られる議論は、前提を問い直し、視野を広げて全体的になっていく。哲学の議論は後者を重視する。それはできる限り広い範囲の多様な視点から、問題を考えようとする態度である。対話に参加したものは、自分の意見が自覚のないままに狭い前提や限られた文脈から出ていることを知り、他の考え方の可能性もあることを理解する。¹こうして、哲学対話によって、参加者は自己束縛を解いて自由になる。それは他者との出会いにより、自分が自分に距離をとっていく過程である。

こうした対話では、問いやテーマに対して解決が出されるというよりは、その問いやテーマ、出される意見に対して、他の問いやテーマ、意見が関連づけられる。子どもの哲学の例を使ってみよう。「偉いつてどういうこと」という質問が子どもから出される。すると、具体例が出されながら、「偉い」という言葉の定義が試みられる。「社会的地位が高い」、「評価に値する」、「努力した」、「すごい」などといった複数の概念と比較対照がなされる。具体的な人物名や振る舞いの事例が出され、その人やその行動が「偉い」という形容に値するかどうかが論じられる。これらの事例は単なる寄せ集めなのか、それとも「偉い」には共通性があるかどうかを検討される。褒め言葉としては、自分よりも目上や年上の人には「偉いね」とは言わない、などといった、言葉が使用される文脈や場面も論じられる。さらに、ある人から、ある地方では、「えらいやつちゃん」^②とか「えらいことしてくれたな」といったように、批判あるいはヒタンの表現として「えらい」が使われることがあるとシテキされる。

これほど多様な定義の^③コウホが出されると、「偉い」についてひとつの決定的な定義に至ることは難しいだろう。さらに「地位が高いとはどういうことか」「努力したと認められるのはどういう時か」「すごいとは何か」とか、「なぜ人は人を褒めるのか」「なぜ人は評価するのか」とか、「そもそも、なぜ偉いかどうかが気になるのか」といったメタレベル²に問いは移行していく。ひとつの問いは無数の線によって他の問いとつながっており、最初の問いに答えるには、すべての問いに答えなければならぬ。¹

B、このような哲学対話では何が行われているのであろうか。それは意味づけである。「偉い」という概念は、対話によって、他のさまざまな概念との関連が示され、それが用いられる文脈や場面が明らかになっていく。関連した概念もさらに他の概念との関連が示されていく。こうした関連づけは、意味づけと呼んでよい。ひとつのテーマや問いが、他のテーマや問いのネットワークの中に、水平的に階層的に、時間的に空間的に、位置づけられていく。これがズームアウトする議論の成果である。

対話では、自分の意見も全体の中に位置づけられ、意味づけられていく。単に私の意見の真偽や正否が検討されるだけではない。他の意見との間でどのようなポジションになるのか、どのような前提に立ち、どのような帰結をもたらすものなのかが徐々に明らかになっていく。

人は自分の意見にしばしば固執している。自分の意見が批判されることは、自分が否定されているかのように感じるかもしれない。それゆえに、人は、自分が傷つき、他人を傷つけることを恐れて、議論を避けようとする。議論することは、他者と戦い争うことであるかのように思つて、主張が正しいかどうかよりも、ときにダキョウ^④し、ときに付和雷同し、ときに多数派について議論を終了させようとする。声が大きいくだけで正しくない意見でも追隨する。³戦争よりは圧政の方がましだといわなければならない。

しかし対話では、さまざまな意見が多角的に検討されることにより、あらゆる意見が相対化される。ここで相対化されるとは、意味づけられるのと同じことである。そうして私の意見は、疑問や反論にさらされながらも、一定の位置づけ、すなわち意味

づけを得る。多くの人が対話に参加すればするほど、全体が理解されていく。それは、自分の意見が位置づけられることであると同時に、自分自身がグループのなかに存在する意味を見いだすことでもある。参加者のグループが分かち合うのは、この意味の全体像である。哲学対話では、^⑤チュウショウ概念を振り回すのではなく、参加していくことによって全体の理解が生じてくる。

C

、対話には、参加者を真にグループに包括していく働きがある。

哲学対話で行われるのは、問題解決ではなく、問題の意味づけである。意味づけとは、価値づけでもありうる。価値とは優先順位のことである。あるテーマが他のテーマとの関連で優先されるべきであると判断されれば、そのテーマの価値が理解されたのである。

では、対話の終着点、あるいは目標とは何であろうか。意味の全体像を得ることだろうか。そう言えるが、より多様な観点や視点から発言がなされることによって、文脈や枠組みがさらに広い範囲へと広げられることによって、**D** さらにメタレベルの議論がされることによって、意味の全体像はむしろ広がっていき、最終的な全体像など得られそうにない。であるならば、対話の目標をどこに置けばいいのだろうか。

それは、新しさの発現である。新しさとは新しい組み合わせのことである。あるものは、これまでとは異なった関連性や文脈、枠組みの中に入ることによって新しさを得る。ある問いが新しい枠組みに置かれて、これまでとは別の展開を見せること、あるテーマが異なった人により異なった文脈により論じられること、自分の考えが意外な関連性のもとに置かれてこれまでとは異なった価値づけがなされること、これらが新しさの発現である。グループでの対話が新しい意味と目的を創発して、個人にとってもそれまでとは異なった考えを持てる場所となる。各人が自分自身を更新して、それまでの自分から自由になることができるならば、その対話は成功したのである。哲学対話には、あらかじめ決められた到着点も方向性もない。唯一重要であるのは、新しさである。新しい存在を生み出すことである。

対話は、新しさを生み出すことが目的であるかぎり、その過程には終わりが無い。それは更新することそのことに意義がある、^⑥ と言い換えてもよい。ジョン・デューイは、教育の目的とは、成長そのものであると主張した。教育には到達地としての

目的などない。固定された目的などは存在せず、人々の間で目的が一致するわけでもない。「どこへ向かっての成長か」という問いそのものが、成長の概念に反するのである。というのは、成長とは運動だからである。成長とは、さまざまな人間との接触により、他者との交流に身を開き、いつそう豊かな経験、さらに新しい経験をしていくことである。成長の過程が、次の段階を自生的に生み出すのである。対話の目的は、対話の過程の外から与えられてはならない。いや、対話には特定の目的地があつてはならない。もし対話の目的があるとすれば、新しさを追求すること以外ではない。それは、地上に新しい生き物を生み出す共同行為なのである。

(河野哲也『人は語り続けるとき、考えていない 対話と思考の哲学』による)

【注】 * 遡行的 〓 さかのぼること。

* 鳥瞰図 〓 ここでは全体を見通すこと。

問一 ――線部①～⑤のカタカナを漢字に書き改めよ。

問二 空欄 **X** に当てはまる語として、最も適切な

ものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 画一性 イ 多様性

ウ 独創性 エ 普遍性

問三 空欄 **A** **D** に当てはまる語とし

て、最も適切なものを次の中から選び、それぞれ記号で答えよ。

ア では イ しかし

ウ あるいは エ それゆえに

問四 ――線部1「こうして、哲学対話によって、参加者

は自己束縛を解いて自由になる」とあるが、それは具体的にどうなることか。説明せよ。

問五 ――線部2「メタレベルに問いは移行していく」とあ

るが、「メタレベル」な問いとはどのようなものか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 自分の説を深めて強化することによって、どのような反論にも耐えられるもの。

イ 他の問いと関連付けられることによって、全体にかかわる広く多様な視点にわたったもの。

ウ 問題点を洗い出すことによって、解決しなければならぬ問題がはっきり区別できるもの。

エ 常に新しさを追求することによって、これまで誰も考えてこなかった概念を見つけたもの。

問六 ――線部3「戦争よりは圧政の方がましだ」とある

が、「戦争」と「圧政」とは議論においてどういうことを意味する言葉か。解答欄に合うようにそれぞれ説明せよ。

問七 ――線部 4「成長の過程が、次の段階を自生的に生み出すのである」とあるが、それはどういうことをいうのか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア より多様な観点や視点に気づき、自分自身が更新されると、新しい見聞や行動につながっていくということ。

イ 対話の目標をあえて見失うことで、過程の中から新しい問題点を導き出すことができるようになるということ。

ウ あるテーマや問いを詳細に論じていくことで、問題を解決することができれば、そこから新しい問題に気づけるということ。

エ 対話の成功にこだわるのではなく、失敗することを恐れずに、強い意見に従わないことから、新しい議論の仕方がわかるということ。

問八 この文章において筆者は「哲学対話」と「他の対話」との違いをどのように述べているか。解答欄に合うようにそれぞれ説明せよ。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

クラスで流行^{はや}っているアニメの映画があつて、僕はそれを見に行きたかつたから土曜日に颯太^{そうた}と一緒にお母さんに連れて行ってくれるように頼んだ。お母さんはすごく疲れた顔をしていて、なんとなく具合も悪^{わる}そう^{そう}で、それから
A しているふうでもあつて（お母さんは、いつも怒っているみたいな顔をしているけど、夏はとくにそうなる）、頼みながら、やっぱりやめといたほうがいいなと僕は思つて、すぐにそのお願いをとりあげた。お母さんは、助かるわ、と短く言つた。

それを横で聞いていた兄ちゃんが連れて行ってくれると言つた。僕と颯太はとても喜んだ。

その映画が公開されている映画館は車で三十分ほどの郊外のショッピングモールの中にあつた。「僕たちだけでどうやって行くの？」と僕は兄ちゃんに聞いた。兄ちゃんは高校生だからまだ車を運転できないのだ。

「バスで行くよ」

兄ちゃんの言葉に、その手があつたか、と僕は思つた。そしてさらに喜んだ¹。僕たちは小学校の遠足以外でバスに乗つたこととかなかつたから、とくべつな感じがしてうれしかったのだ。颯太なんかははりきつて水筒に麦茶を入れていて、まったく子どもであると僕は思つたのだつた。

支度をして、これから出かけるぞつていうときに、お母さんが言つた。

「そんなかつこで出かけたらかわい²そうじゃない、ズボンにしなさい」

それは兄ちゃんに向けられた言葉で、つまりそれは、女の人みたいなかつこをしている兄ちゃんと一緒に歩くことになる僕と颯太がかわい²いそうだから着替えろ、という意味である。

兄ちゃんはそのとき、膝より少し長いスカートと丸いエリのついたブラウス（つていうのだろうか）を着ていた。

僕は、ひどいことを言うお母さんにカチンときた。こういう言葉が、中三のときに兄ちゃんを爆発させた暗ⁱいぐるぐるを大きくするつてことを、お母さんは全然わかつていない。

そのままでもいいよ、と僕は言って兄ちゃんの腕を引つ張つて外に出た。

僕と颯太は兄ちゃんと一緒にバスに乗り、郊外の大型ショッピングモールの中にある映画館で三人並んで、ポップコーンを食べながら、オレンジジュースを飲みながら、目当ての映画を見て、その日はすごく楽しかった。これはまちがいでなく今年の夏のハイライトになるにちがいないと、エンドロールを見ながら僕は思ったものである。映画の中身が楽しかったのはもちろんだけど、兄ちゃんとバスでここまで来て一緒に映画を見たこと自体が、とくべつな感じがして、その楽しさを何倍にも大きくしていた。

エンドロールが終わって映画館を出るとすぐに颯太がやかましくしゃべりだして、それはたぶん映画の感想を思いつくことから順番に言っていたんだろうけど、ミヤクラクがなくて何を言ってるのかわからなかった。そのまましゃべらせておいて、昼ご飯を食べようということになった。

僕たちはショッピングモールの中にあるファストフードのお店に行って、ハンバーガーとポテトを食べた。僕は兄ちゃんのおサイフ事情を心配したが、大丈夫と兄ちゃんは言った。バスに乗って映画を見てハンバーガーまで食べるなんて、カンペキすぎて、このあと何か悪いことが起こるのではないかと僕は不安になったくらいだ。

そしてその不安は見事に的中した。

食べ終えて、B 席を立とうかというときに、知っている顔が店にやってきた。宮田君と木下君^{きのした}だった。二か月後に

ABCミネストローネ事件で僕を非難することになる二人である。

二人はとなりのクラスの男子二人(たぶん同じ塾に通ってる仲間だ)と、計四人で連れ立って来ているみたいだった。彼らは僕を見つけるとこちらにやってきて、「サキじゃん」と言った。僕はちよっとだけ二人と言葉を交わした。

「映画を見に来たんだ」と僕は言った。

「おれらも」

と言ってから、二人は僕の向かいに座っている兄ちゃんを見てぎょっととした顔をして、それから顔を見合わせて、また僕を

見て、最後に兄ちゃんをもう一度見た。じゃあ、と言ってとなりのクラスの二人と合流して向こうの席についた。席についてすぐに二人がとなりのクラスの二人に何か言った。四人はちらちらとこちらを見て、また何かを言い合って、笑った。

僕たちは店を出た。

ショッピングモールも出て、バス停まで歩くあいだ、颯太は、さっきまではあんなにうるさかったのに、一言もしゃべらなかった。それは宮田君や木下君たちに僕たちの兄ちゃんをバカにされたっていうのを、颯太が感じたからだと思う。

でも僕は、そんなの全然、これっぽっちも気にしていなかった。

これは強がっているのではなくて、ほんとうにそうなのだ。

兄ちゃんの味方同盟の初期メンバーである僕が、そんなことを気にするはずがないじゃないか。さっきの四人の態度で兄ちゃんがイヤな思いをしたんじゃないかってことは気にしたけど、僕自身は、女の人のかっこうをしている兄ちゃんをクラスメイトに見られて恥ずかしかったとか、そんなことは一ミリも思っていなかった。

だから僕は兄ちゃんに「全然気にしてないよ」って言ってもよかったんだけど、それを C 言うのもへんだと思った

から、言わなかった。代わりに何かふつうの話をすればよかったんだけど、うまい話題が見つからなかったし、むりにしゃべったら何かをとりつこうみたいな感じになってしまいうんじゃなかった気がして、無言でいることしかできなかった。

帰りのバスはなぜかけっこうすいていて、うしろの、五人くらい並んで座れる席に、颯太を真ん中にして三人で座った。颯太はバスが走り出してすぐに寝ちゃって、僕は、バスに揺られながら窓の外の景色けしきを見ていた。十分ぐらいして、ごめんねっていう兄ちゃんの声が聞こえて、僕は聞こえないふりをした。この日はこの夏のハイライトになるはずだったのに、僕は泣きそうだった。⁴

なんで兄ちゃんが僕に謝るんだ。僕は兄ちゃんに映画館に連れてきてもらってうれしかったし、今日は楽しいことしかなかったんだから、謝られるようなことはひとつもないのだ。もしも「自分が女のかっこうをしていることで弟に恥をかかせてしまった」とでも思って、そのことを悲しんでいるならそれはまちがいで、僕は兄ちゃんに感謝はしても、恥ずかしいと思ったこと

はないから、お願いだから謝ったりなんかしないで。

という気持ちを順序立てて言えればいいんだけど、これは、いまだから整理してこうして言葉にできることで、このときは、僕は何も言うことができなかった。声を出そうとすると、のどがぐっと詰まった感じになって、下あごが痛くなって、涙が出てきそうになるのだ。それでむりをして何かしゃべろうとして、もしも泣いちゃったりしたら、兄ちゃんは何か勘がいしてもっと謝ってきたりして、それで僕はもっと泣いちゃって、

D

思っていることが言えなくなったりするだろう。

悲しいことが体にたまると爆発しちゃうんじゃないかって僕は最初に言って、ABCミネストローネ事件なんというしょうもない事件のことを話したけど（これもたしかにつらかったんだけど）、僕がほんとうに悲しくなって、体が爆発しちゃうようになるのは、こんなふうに、自分のことじゃなくて、自分以外の誰かの悲しいって気持ちを強く感じた瞬間だ。そしてそれは、いまのところ、ほとんどが兄ちゃんの悲しい気持ちである。

僕はこの日から、朝起きたときとか、授業中とか、お風呂に入っているときとか、ご飯を食べているときとか、夜寝る前とか、時間を選ばずに、一日に三回くらい、あのときの、兄ちゃんの「ごめんね」を思い出して、発作みたいに胸が痛くなる。胸が痛いつているのはヒュじゃなくて、ほんとうの痛みだ。胸が何かにぎゅーっとしめつけられる。思い出すたびに、「あの日、兄ちゃん僕たちを喜ばせるために映画館に僕と颯太を連れて行ってくれて、でも帰りのバスでは、『自分のせいで弟に恥ずかしい思いをさせた』って思ってた僕に謝ったことで……」ってエンエンと考えてしまつて、僕はたまらなくなる。いちばん悲しい思いをしているのは自分なのに、弟の気持ちを考えて、さらに悲しい思いをしてしまう兄ちゃんの優しさが僕は悲しい。

それで、僕が何を言いたいかというと、こんなにも優しい兄ちゃんを、家族であるお母さんが——兄ちゃんに誰よりも近い、産んだ張本人であるお母さんが——どうして理解してあげないのかって、僕はおこっている、ということだ。

このことについても、僕は前にじいちゃんと話をしたことがあった。そのときに、「人によっては、大人になると変化に対して不寛容になる」とじいちゃんは言っていた。

「フカンヨウ？」

「自分の尺度からはみ出したようなことに対応するのがむずかしくなっちゃうんや」

「シヤクド？」

「ものさしっちゅうのかな」

「……ものさし？」

ものさしとは、じょうぎのことだ。僕の筆箱にも入っている。算数で使う。

「長年かけてかたくなったものさしってのはかんたんには壊せんもんや」

（中略）

それはともかく、この日の僕には家に帰ったあとにスイコウすべき重大な任務があった。

それは、昼間、栗田君に教えてもらった「ヒトカツパリロン」⁵で、頭のかたいお母さんをどうにかして兄ちゃんの味方同盟に引き入れようというものである。

その任務は夜の八時半くらい、ちょうど兄ちゃんがお風呂に入っているときに、お母さんが仕事から帰ってきたという絶好のタイミングで実行に移された。

僕はまずお母さんが夕食を食べるために食卓についた、その向かい側に座って、ごく自然な感じで宿題のためのノートを広げて、しばらく算数の計算問題を解いた。それから、それなりの年齢になってきたから僕もそろそろ気になってきてたしかめずにはいられない、みたいな調子で、「お母さん、僕のお父さんて、いまどこで何してるの？」と不意打ちで言った。

お母さんは驚いたような顔をした。僕がお父さんのことについてたずねたのは初めてだったから、それもそうだと思う。でもお母さんは動揺は見せないで、知らないわ、と言った。たぶん、ほんとうに知らないのだろうと思ったし、僕は正直に言って、記憶にないお父さんにそんなに関心はなかったから、それはべつに問題なかった。

「お父さんて、男だったんだよね？」

「そうよ」

「お母さんで女でしょ？」

……当たり前でしょ、とお母さんは投げやりな声で言った。

「人間とカップパの子どもは、カップふうの人間になるんだよ。お母さん、知ってた？」

「初めて聞いたわ」

さっきからお母さんの目はぼうつとテレビのほうを向いている。

リモコンのスイッチを押してテレビを消すと、お母さんはやっと僕のほうを見た。目が落ちくぼんで、なんだかガイコツのように見える。

「ダックスフントとシベリアンハスキーの子どもは、胴が長くて足が短いオオカミみたいな姿で生まれてくるんだって」

「そう」

「それで、思ったんだけど、男と女の子もだったら、体が男で心が女っていうのは、そんなにへんなことじゃないと思う」

お母さんは僕の画期的な意見に対して、

「ちゃんと宿題やりなさいよ」

それだけ言ってみそ汁を飲み干すと、席を立てて食器を流しに運んだ。

「お母さん、僕、真剣に話してるんだよ。なんで兄ちゃんのことわかってあげないんだよ」

って言いながら、僕はこのときも泣きそうになってしまった。兄ちゃんのことを話そうとすると、どうしてか僕はすぐに泣きそうになる。

お母さんは、いまのあなたの言葉で十歳余分に年をとってしまったわ、みたいな非難の響きを込めた声とくたびれた顔で「あんまりお母さんを疲れさせないで」と言っコップに水を一杯飲んで飲んだ。つまり兄ちゃんの話はしたくないって意味だ。

どうしてお母さんはこうなんだろう？ お母さんが兄ちゃんのことを理解してあげようとしれない限り、たぶんまたいつか兄ちゃんは暗いぐるぐるに苦しむことになってしまうのに。

僕は筆箱からプラスチック製のじょうぎを取り出して右手と左手でそれぞれの両端をもってしならせ、バカ！　って言いながらお母さんの目の前でパキンと折った。今年いちばん怒られた。

お母さんがダイニングから出て行ったのと同時に兄ちゃんがやってきた。とっくにお風呂から上がって、僕とお母さんのやりとりを聞いていたんだ、と思った。

兄ちゃんは僕のとなりに座って、お母さんに敗れた僕の頭に手を置いて、ありがとうって言った。僕は、いまの僕じゃお母さんを動かすことはできないんだなと思ってすごく落胆していた。

（小嶋陽太郎『放課後ひとり同盟』所収「僕とじょうぎとぐるぐると」による）

問一 空欄 A 〽 D に当てはまる語として、

最も適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア イライラ イ そろそろ
ウ ますます エ わざわざ

問二 — 線部 1「さらに喜んだ」とあるが、「さらに」とは、何に何が加わったのか。解答欄に合うように答えよ。

問三 — 線部 2「かわいそう」とあるが、母親がそう考える理由を説明せよ。

問四 — 線部 3「不安は見事に的中した」とあるが、「的中した」「不安」とはどのようなものだったか。最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 兄の提案で昼ご飯をハンバーガーにしたことが、母との関係をもっと悪くすること。

イ 流行っている映画を友だちと見に行かなかったことが、となりのクラスにまで知られること。

ウ ファストフード店で出会った僕のクラスメイトたちが、兄の格好を見てこっそり笑ったこと。

エ ミヤクラクのない颯太のおしゃべりが、楽しかった映画の感想を台無しにしまったこと。

問五 — 線部 4「僕は泣きそうだった」とあるが、その理由をこの時の「兄ちゃん」の行動や気持ちに注目して説明せよ。

問六 — 線部 5「ヒトカッパリロン」を使って、「僕」は母にどのようなことを伝えたかったのか。説明せよ。

問七 — 線部 6「お母さんの目の前でパキンと折った」とあるが、「お母さんの目の前で」折った「じょうぎ」は、「僕」にとってどのようなものを示しているか。説明せよ。

問八 ズズズ 線部 i・ii「暗いぐるぐる」とはどのようなことを示しているか。説明せよ。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

今は昔、薬師寺の別当僧都*べつたうそうづといふ人ありけり。別当はしけれども、ことに寺の物も使はで、極楽に生まれんことをなん願ひける。

年若い、病して、死ぬるきざみ*になりて、念仏して消え入らんとす。無下むげにかぎりで見ゆるほどに、よろしうなりて、弟子を呼びて言ふやう、「見るやうに、念仏は他念なく申して死ぬれば、極楽の迎へ、いますらんと待たるに、極楽の迎へは見えずして、火の車を寄す。『こは何ぞ、かくは思はず。何の罪によりて、地獄の迎へは来たるぞ』と言ひつれば、車につきたる鬼どもの言ふやう、『この寺の物を一年五斗借りて、いまだ返さねば、その罪によりて、この迎へは得たるなり』と言ひつれば、われ言ひつるは、『さばかりの罪にては、地獄に墮つべきやうなし。その物を返してん』と言へば、火の車を寄せて待つなり。されば、とくとく一石誦経*ずきやうにせよ』と言ひければ、弟子ども、手惑ひをして、言ふままに誦経にしつ。その鐘の声のするをり、火の車帰りぬ。さて、とばかりありて、「火の車は歸りて、Xの迎へ、今なんおはする」と、手をすりて悦びつつ、終わりにけり。

その坊は、薬師寺の大門の北の脇にある坊なり。今にそのかた、失せずしてあり。さばかりほどの物使ひたるにだに、火の車迎へに来たる。まして、寺物を心のままに使ひたる諸寺3の別当の、地獄の迎へこそ思ひやらるれ。

(『宇治拾遺物語』による)

【注】 *別当 寺の仕事を統括する重要な役職。

*きざみ 〓 まぎわ。

*五斗 〓 米などの量の単位。九〇リットル程度。一石はその倍。

*誦経 〓 誦経料。寺への寄付。

問一 ―線部 1「さばかりの罪」とはどのような罪か。説明せよ。

問二 ―線部 2「火の車帰りぬ」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。
ア 寺から無断で借りていたお米を、倍にして返却したから。

イ 火の車を連れて来た鬼たちの、勘違いであることがわかったから。

ウ 仏がすべての罪を許すことを表す、除夜の鐘の音が響き渡ったから。

エ 神聖な場所である薬師寺の大門を、通り抜けることができなかったから。

問三 空欄 X に当てはまる適切な語句を、文中より一語で抜き出して答えよ。

問四 ―線部 3「諸寺の別当の、地獄の迎へこそ思ひやらるれ」とあるが、諸国の寺の別当に、地獄の迎えが来る理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えよ。

ア 弟子たちを惑わせて、間違った修行をさせる者が多いから。

イ 人に米を貸して、倍の量を返却させるような者が多いから。

ウ 死ぬまぎわまで、自分のこれまでの悪行を悔いない者が多いから。

エ 寺の財産を、自分の所有物であるかのように使用する者が多いから。

